

# 「関交研懸賞論文」の 審査結果について

## 2012年度 [審査委員会講評]



審査委員長代行

神戸大学大学院教授

小谷 通泰

### 過去最高の応募数 多岐にわたるテーマ・階層

「関交研懸賞論文」は2012年度でようやく5年目を迎え、本年度は6大学から延べ9編の応募があった。

近畿圏における運輸交通・観光の一層の発展と地域社会の活性化に寄与するような「積極的でユニークな提案・提言」を求めるといのがこの懸賞論文の主旨であるが、応募論文はこうした観点からみていずれも力作ぞろいであつた。

応募論文で取り上げられたテーマは、防災対策2編、観光政策3編、公共交通政策3編（うち1編は道路交通政策とセット）、国際空港の活性化方策1編ときわめて多様であり、応募者も、学生のためのグループ5編、研究者を

含むグループ（研究者のみ、あるいは研究者と学生）4編と変化に富んでいた。応募して頂いた皆さん方には、深く感謝の意を表する次第である。

応募された9編の論文については、6名の審査委員により事前に個別審査を行った上で、2012年12月10日に審査委員会を開催し審査を行った。審査委員会では、まず論文としての完成度において、学生のみグループと研究者を含むグループとの間に顕著な差がみられることから、それぞれのグループ（学生部門・研究者部門）ごとに審査を行うこととした。

審議の結果、「優秀賞」として、学生部門、研究者部門からそれぞれ1編ずつ、計2編の論文が選ばれた。受賞された方々には、心よりお祝いを申し上げたい。以下では、2編の入賞論文について審査結果を報告させていただく。

### 提案モデルの有効性を実証的に検証した中川・桑野論文

まず、研究者部門では、中川辰則さん・桑野将司さん（神戸大学大学院工学研究科市民工学専攻）による論文「行動要素間の相互依存性を考慮した観光施設評価手法の提案」が選ばれた。本論文では、観光行動は、目的地選択、出発時刻選択、滞在時間選択、消費金額選択などの複数の行動要素で構成されており、このため観光施策の立案においては、異なる行動要素間の相互依存性を把握することが必要であるとしている。こうしたことから、本論文では、それぞれの行動要素に影響を及ぼす要因と、行動要素間の相互依存性を同時に分析できる同時決定モデルを開発している。具体的には、行動要素として観光入り込み客数と一人当たりの観光消費額の2要素に着目し、コピュラ関数を用いた多変量生存時間モデルによる分析方法を提案し、京都府と兵庫県との35地域を対象に本モデルを適用している。

この結果、相互依存性を表現したモデルが、相互依存性を考慮していないモデルよりも有効であることを検証している。また、主要都市への所要時間

やアウトドア施設数などの要因が、観光入り込み客数と一人当たり観光消費額に影響を及ぼすこと、さらに観光入り込み客数と観光消費額には正の相互依存関係があることなど、興味ある結論を導き出している。

一方、著者らも指摘しているように、限られた地域のサンプルを用いた分析であるため、観光スポット（寺院、温泉、遊園地、ショッピングモール等）に関する変数が入込客数と観光消費額に有意な影響を及ぼさない結果となるなど、この点についてはモデルの改良が必要である。今後は、複数の交通行動要素を同時に分析することにより総合的な観光施策の立案を行いたいとしている。

このように本論文は、観光行動において、行動要素を規定する要因と、行動要素間の相互依存性を同時に分析できる同時決定モデルを提案し、収集したデータにもとづいて提案モデルの有効性を検証しており新規性、独創性が認められる。論文全体は論理的に構成されており、学術性・完成度が高く、現象の解明に寄与するものである。こうした点で、本論文は高く評価された。

一方で、今回はモデルの開発に主眼が置かれており、また限られた行動要素しか分析対象とされていないことから、具体的な提案・提言までは言及されていない、との指摘もなされたが、総合的な観光施策の立案に向けて、今後の研究の更なる展開に対して強い期待が示された。

## 地道なフィールドワークでの問題点の発見を評価された

山村・田村・木下論文

次いで、学生部門では、山村聡史さん・田村嘉崇さん・木下正平さん（関西大学社会安全学部安全マネジメント学科）による論文「JR西日本の紀勢

線の津波対策の検討」が選ばれた。本論文は、南海トラフ地震により直接的な被害が想定されるJR紀勢線を対象に、鉄道利用客への津波対策について、現地調査によってその効果や問題点を検討したものである。

ここでは、まず津波対策をハード面（車外への脱出用の避難梯子やセーフティライトなどの装備）とソフト面（避難ルートマップ、乗務員を対象とした津波避難誘導心得などの整備）に分けて解説している。そのうえで、和歌山沿岸部の紀勢線4駅において、主として避難ルートマップおよび避難ルートにおける対策の実態と問題点を調査している。この結果、ルートマップと避難経路とが一致していないことや経路の案内が不明瞭であることなどを発見し、こうした対策は絶えず見直しを行い更新することが必要であること、地元と連携しながら、観光客など初来訪者の視点からも検討が行われるべきことを述べている。

また避難経路で、箇所により避難者が殺到し容量不足が生じる可能性があることを指摘しており、避難行動のシミュレーションを行うことによって、こうした危険を事前に予知しておくことが重要であるとしている。

このように本論文では、近い将来に発生が予想される巨大地震への備えという、緊急度の高いテーマを取り上げて、現地に赴いて担当者から直接ヒアリングし、自分たちで実際に避難ルートに沿って歩くという地道な取り組みにより、対策の問題点を発見し提案・提言を行っている。また、提案・提言の内容は、実務上有用であるとともに、防災意識の向上という観点からも波及効果は大きい。こうした点で、本論文は高く評価された。

一方で、今回の現地調査では調査内容がやや断片的であり、調査方法・項目に対する事前の十分な準備が必要であることが課題として指摘されたが、こうした調査は防災対策の実効性を高める上で重要であり、今回の提案・提言のフォローアップも含めて、今後も継続して調査が行われることに大きな期待が寄せられた。



## 選外作品にも興味深いテーマや問題意識の高さ

以上二つの論文はいずれも本懸賞論文における優秀賞受賞にふさわしい質の高い論文であった。また一方で、惜しくも選外となった論文についても、多くの興味ある提案・提言がなされており優劣がつけ難く、審査委員を大いに悩ます結果となった。あらためて応募者各人の問題意識の高さ、取り組まれたテーマへの情熱が感じられた。次年度も本懸賞論文を通じて、学・官・民を問わず、幅広い分野の次世代を担う皆さん方から、より多くの独創的な提案・提言を行って頂くことを切に希望している。

## 懸賞論文表彰式

第14回コロキウム「入選論文のプレゼンテーション」に先立って、2012年度の懸賞論文表彰式が施行され、公益財団法人関西交通経済研究センター岩崎理事長から入選者の皆様に対し、表彰状と副賞が授与されました。

